

沖縄以南の南西諸島でチョウを追いかけるなど夢のまた夢だと思っていたが、1993年9月、琉球大学医学部への業務出張が入り、この機会を逃す手はないと名護地区に宿を手配する。出張当日に台風が接近して那覇市から名護へと向かう路線バスが風速25m以上となれば運行休止となる寸前の便に乗り込めるラッキーに恵まれて、翌日台風一過の平敷-伊豆味でハイビスカスの垣根に降ってわいたように次々と出現する大きくて美しいツマベニチョウを満喫。伊豆味地区では民家庭先の花で複数のカバマダラが吸蜜しており、横山光夫著「原色日本蝶類図鑑」を飽かず眺めて、ひたすら憧れていた南国のチョウが目の前で舞う光景に感動を覚えた。この図鑑には沖縄・奄美大島でも少ないと記されているが、すでに沖縄・南西諸島には普通種として定着しており、2007年11月には和歌山太地町の路傍トウワタにつく幼虫を見つけて飼育羽化させるような体験ができるほど行動範囲の広いチョウだ。



Nov. 24, 2007 太地町粉白



Dec. 19, 2007 羽化

以下、紀行文の関連記述を一部改変して転載。

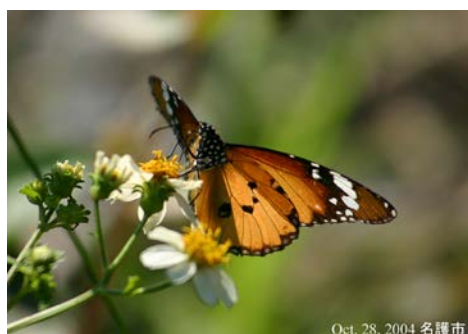
1993年9月3日：沖縄本部半島。伊豆味の町に入ってから民家の庭に咲くランタナ花上に複数頭のカバマダラが遊んでおりしばらくはうっとりとしとれてしまう。ツマベニチョウも民家周辺に咲くハイビスカスの花を次々と訪れている（右図は初採集個体）。



名護伊豆味 Sep.3,1993 カバマダラ

2001年9月8日：石垣島富崎：アスファルト道路が急な下りとなってふたたび急坂を上る場所でカバマダラの群れ飛ぶ光景に出会う。ここでもVideo撮影を試みるが、なかなかいい映像は撮れない。それにしてもこの個体数の多さはすごい、と感心しながら次の坂道を下って、カバマダラが多い理由をすぐに納得する。そう、坂道を下ったところこそフサキリゾート昆虫園（2002年に閉鎖）そのもので、ここで発生させたカバマダラが次々と自然界へと遊びにでていっているのだ。

2004年10月28日：沖縄名護市。すでに16時近いため、日当たりのいい場所を探して進むと、昔は荒地だった場所に何軒かの民家が建ち、名護城側の林縁に沿って幸地川が流れ、その周辺に適度な草原が広がる場所に出る。幸いここらに咲くセンダングサを中心にアオタテハモドキやタテハモドキ、カバマダラ、ヒメアカタテハなどが残りすくない時間帯を惜しんで遊んでいる。奥の林周辺にはツمامラサキマダラの雌雄が飛び交う。さっそくカメラを準備していいアングルをと、



Oct. 28, 2004 名護市

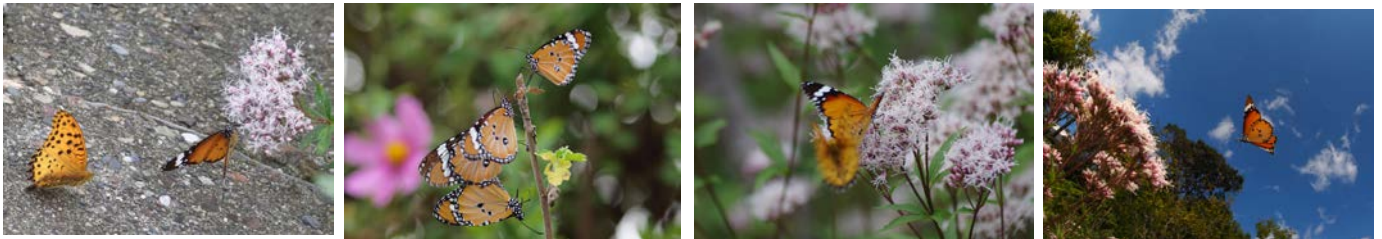


Oct. 28, 2004

と、チョウの気持ちになってその動きについてゆく。次第に草原に届く陽光がその範囲をせばめてゆくなかで、カバマダラが次々と場所をかえてセンダングサの花蜜を求める姿を逆光でも捉えてみる。

## 追記

ツマグロヒョウモンのメスが毒成分を体内に持つ本種に擬態している、との説があるが、筆者は擬態というのはあくまで偶然に似た模様を持つ種・個体がいるだけで、自然界である種が他の種に似せた方が好都合だからとあとで変化するなどということはありませんと考えている。それでも模様が似た他の種を同種だと勘違いすることはあっても不思議ではなく、2009年と2013年にツマグロヒョウモンのオスが本種のメ스에誤求愛する場面が記録されていて、その観察記録をとられた高知市在住の中川さんご夫妻と連絡をとり、さらに中学時代の蝶友である大野浩氏からも高知市内で偶発した迷蝶カバマダラのデータを提供いただいて、日本鱗翅学会誌「やどりが」に投稿発表した。誤求愛シーンの記録は中川氏が高知市五台山牧野植物園内で撮影されたもので貴重なデータであり、個人のブログに掲載するだけではもったいない、との思いでEメールで問い合わせ、論文投稿になれている筆者が共著者となって投稿し、中川さんご夫妻には自分たちの名前が出る公式発表というのは初めてだと喜んでいただけた。



論文には鮮明度が重視されるため上記4枚の画像を採用したが、実際に誤求愛をする場面としては以下の画像の方がより臨場感を示している。

